神戸市塩屋の洋館・旧ライオン ス邸と旧グッゲンハイム邸

— 2つの住宅の取り違い問題と新事実
について

THE STUDY ON THE FORMER LYONS' HOUSE AND THE FORMER GUGGENHEIM HOUSE IN SHIOYA KOBE

— New findings and clarification on the confusion
between the two houses

水島あかね — *1 笠原一人 — *2

キーワード：
旧グッゲンハイム邸, 旧ライオンス邸, 洋館, 神戸市, 塩屋

Keywords:
Former Guggenheim house, Former Lyons house, Western-style
house, Kobe, Shioya

Akane MIZUSHIMA — *1 Kazuto KASAHARA — *2

This paper shows that the famous western-style house called “The Former Guggenheim House” was actually built by J. Lyons in Shioya, Kobe, from the end of 1907 to 1908. “The Former Lyons house,” also known as the former Takeuchi house, was built by J. Guggenheim. For a long time, those two houses have been mistaken. J. Lyons established J. Lyons & Co., and this company will later become Nickel and Lyons Ltd.. F.M. Jonas and P. Watson, who were deeply connected with J. Lyons, joined his company and acquired land in Shioya. We can affirm that J. Lyons influenced the development of Shioya into a resort area.

1. はじめに

神戸市垂水区塩屋町に“旧グッゲンハイム邸”と呼ばれる洋館が現存している。塩屋は、六甲山系の西南端に位置し、海と山に挟まれた神戸市の中でも最も海と山の距離が近い。そのため戦前期はリゾート地として人気を博し、北野山本通地区と並ぶ外国人の集住地として発展した。しかし、時代とともに塩屋の洋館の多くが姿を消し、現在残る洋館は数えるほどである。

2007年、解体の危機にあった、この“旧グッゲンハイム邸”を塩屋在住のデュルト森本家が購入した。以降、同洋館は、結婚式をはじめ、演奏会や講演会など様々なイベントの会場として活用されている。同洋館を活用した幅広い活動が実を結び、今では塩屋といえば“旧グッゲンハイム邸”が想起されるくらいに、この名称は広く一般に定着した。2017年には管理人が著した『旧グッゲンハイム邸物語』が出版され、その後も著名な映画のロケ地に選定されるなど“旧グッゲンハイム邸”の名は、国内外にさらなる広がりをみせている。

2020年春、この“旧グッゲンハイム邸”の北側に位置する洋館、旧竹内邸^{注1)}に解体の危機が生じた。日本建築学会近畿支部から現所有者に対して「保存活用要書書」¹⁾を提出するため、著者ら^{注2)}が旧竹内邸の建物調査を進める過程で、“旧グッゲンハイム邸”にはグッゲンハイム家による建設や居住の記録がないことが判明した。実際には、旧竹内邸の施主がジェイコブ（通称ジャック）・グッゲンハイム（Jacob/Jack Guggenheim 1874-1940）であり、“旧グッゲンハイム邸”の施主がヤコブ・ライオンズ（Jacob Lyons 1865-1916）だったという事実が明らかになった。すでに新聞等^{注3)}で報じられているように、これら2軒の建物は50年以上にわたり取り違えられて認識されていたのである。

本稿では、今回明らかになった“旧グッゲンハイム邸”と“旧ライオンス邸”の取り違いに関する新事実を報告する。加えて、J. ライオンズが塩屋で果たした役割についての考察を試みる。

調査方法は、法務局保管の旧土地台帳や公図、当時の英字新聞ジャパン・クロニクル紙^{注4)}や外国人商工銘鑑『THE JAPAN DIRECTORY』⁶⁾所収の『THE KOBE DIRECTORY』などの文献史料調査や関係者及び米国在住のJ. グッゲンハイムの孫ジュリア氏（Julia Guggenheim）への聞き取りによる。なお、『THE JAPAN DIRECTORY』の発行日が、その年の1月初旬から2月初旬である^{注5)}ことから、記録された居住地や勤務地等の情報は前年の情報と捉えた。建物名称に関しては混乱が生じないよう、本稿では一般に定着している名称を、括弧付の“旧グッゲンハイム邸” “旧ライオンス邸^{注6)}”、今回判明した新事実に基づく名称を、括弧なしの旧ライオンス邸、旧グッゲンハイム邸と表記する。ただし旧竹内邸については、戦後に竹内家が所有し居住していたことは事実であるため、括弧はつけずに表記する。

2. 旧ライオンス邸が“旧グッゲンハイム邸”と間違えられた経緯

最初に、なぜ旧ライオンス邸が“旧グッゲンハイム邸”と間違えられたのか、その経緯をおさえておきたい。著者らが調べた限り、1961年に発表された、神戸を中心に活躍した英国人建築家 A. N. ハンセル（Alexander Nelson Hansell 1857-1940）に関する坂本勝比古の論文^{1) 注7)}が、旧ライオンス邸を取り上げた最初である。同論文にはハンセルの作品一覧リストが掲載されており、その最後に「建物名称不詳、現称稲畑邸、建築年代はT5（推定）」と書かれた建物が、当時、稲畑産業株式会社が所有していた旧ライオンス邸である。

そして、1969年の『新住宅』8月号に掲載された坂本の解説文「旧

本稿は2020年に塩屋で開催されたトークイベント「まちのかたちキオクノキロク「旧グッゲンハイム邸? ≠旧ライオンス邸」」と2021年日本建築学会大会（参考文献14）での発表内容を再構成・加筆したものである。

¹⁾ 明石工業高等専門学校建築学科 准教授・博士（学術）
〒674-8501 明石市魚住町西岡 679-3)

²⁾ 京都工芸繊維大学デザイン・建築学系 助教・博士（学術）

¹⁾ Assoc. Prof., National Institute of Technology, Akashi College, Ph.D.

²⁾ Assist. Prof., Kyoto Institute of Technology, Ph.D.

グッゲンハイム邸-現・竹内油業塩屋寮」³⁾にある次の記述が、竹内油業塩屋寮が“旧グッゲンハイム邸”であると断言した初出だといえる。

「米人貿易商グッゲンハイム (Jack Guggenheim) が自邸として建てたものであり、彼はこの家と呼ぶにあたって“パイン・シオヤ (Pines Shioya)” の名を冠している。(中略) この住宅の北側にほぼ同一のスタイルをもつ西洋館が建っており、これらの建物のいきさつについて、少年時代グッゲンハイム氏を知っていたという腋護衛氏 (日本名) ^{注 8)} は、“最初北側の洋館をニッケル・ライオンズ商会主のライオンズ (J. Lyons) が建て、すぐ引き続いてグッゲンハイム邸ができたように記憶する”と述べておられる」

(下線は著者)

籾 (えびら) 氏の記憶違いか、坂本の聞き取り間違いかは不明だが、この証言が長らく名称不詳とされてきた洋館を“旧グッゲンハイム邸”と断言する根拠となり、これら 2 棟の建物の名称が取り違えられたきっかけになったことは間違いなさそうである。なお、この解説の中で坂本は 1916 年と推定していた建築年を、「明治 39 年以降同 45 年前の建築と推定」と改めている。

その後、1973 年度と翌年度にかけて、日本建築学会近畿支部と神戸洋風建築物調査特別委員会による神戸市内の洋館調査が実施された。この報告書に収められた洋館一覧には、「建物名称は竹内油業 KK 塩屋寮、設計者はハンセル?」、備考欄には「旧名称グッゲンハイム邸、明治 39 年-45 年の期間内」と記載された。これは前述の雑誌 (1969) の説明文と一致する。同調査には坂本も加わっていたことから、坂本の見解がそのまま記載されたと推察できる。また、この一覧には竹内邸も記載されているが、ライオンズに関する記述は見当たらない。

1980 年に日本建築学会が発行した『近代建築総覧』にも「建物名称、竹内油業塩屋寮 (旧グッゲンハイム邸) 建築年、M39~45」と、先の記録と同様の記載がされている。このように日本建築学会近畿支部に続いて日本建築学会も同洋館を“旧グッゲンハイム邸”と記載したことにより、この名称にはお墨付きが与えられたといえる。以降、同洋館が“旧グッゲンハイム邸”であるという事実が疑われることはなかった。

また、2006 年に兵庫県教育委員会が発行した『兵庫県の近代化遺産』では、「名称は旧グッゲンハイム家住宅、現名称は竹内油業塩屋寮」、根拠が得られないため「推定」あるいは「?」とされてきた設計者は「A. N. ハンセル」、竣工年代は「明治 45 年頃」と記載された。

これまで疑われることなく参照されてきた事実と向き合ったのが、2007 年に同洋館を取得した現所有者である。「KOBE DIRECTORY」の記録や不動産登記事項証明書等により土地建物履歴を調査し、J. グッゲンハイムの孫と繋がり、証言とともに古写真を入手した。そして「Our home in Shioya, Japan」と書かれた写真 (写真 1) などに映る洋館と取得した洋館の外観が異なっていることが判明し、初めてこの洋館が“旧グッゲンハイム邸”であることに疑いが生じた。しかし、取得した洋館が“旧グッゲンハイム邸”であるという事実疑問を抱かなかった管理人は、新たに次のような解釈を加えた。

「お話を伺ったところ、どうやら当初住まれていたのは、旧グッゲンハイム邸の北側にある「旧ライオンズ邸 (= 竹内邸)」と呼ば

れている建物だったようです。そして、ここから先は僕の確信に近い推察になりますが、1909 (明治 42) 年に塩屋に来たグッゲンハイムさんは、その年から 1912 (明治 45) 年までの間に、別宅的に旧グッゲンハイム邸を建てたのではないかと、ということです」¹⁰⁾
(下線は著者)

写真 1 旧グッゲンハイム邸 (撮影年不明) / Julia Guggenheim 所蔵

こうして 同洋館が“旧グッゲンハイム邸”であるという事実は、変わらず今に引き継がれた。後述するが 1965 年以降、同洋館は竹内油業塩屋寮と呼ばれていた。それが“旧グッゲンハイム邸”として積極的に利活用を進める現所有者らと、それを取り上げた多くのメディア等により、新たに“旧グッゲンハイム邸”という呼称に書き換えられ、それが広く一般に定着したのである。

3. 旧グッゲンハイム邸概要

3.1 J. グッゲンハイムの履歴

J. グッゲンハイムに関する記録はほとんど見当たらず、神戸での活動や渡米後のことなど不明点が多い。ここでは J. グッゲンハイムの孫への聞き取りと「KOBE DIRECTORY」をはじめとする文献史料等から明らかになった J. グッゲンハイムの履歴を報告する。

J. グッゲンハイムは、1874 年にドイツに生まれたユダヤ人で、ニューヨークのグッゲンハイム美術館を運営するソロモン・ロバート・グッゲンハイム財団の設立者とは遠戚関係にある。兄弟と共に 1894 年にロンドンに設立された貿易会社 Japan Import & Export Commission Co. ^{注 9)} を経営していた。横浜支店を開設するために 1893 年に来日した兄の B. グッゲンハイム (Bernhard Guggenheim 1868-1958) に続いて、J. グッゲンハイムも 1895 年に来日した。そして J. グッゲンハイムは横浜を経て、神戸支店開設のため神戸に移住した。

1897 年、「KOBE DIRECTORY」の記録に初めて、「Japan Import, Export and Commission Co.」の社名と「Guggenheim. J」の名前が登場する。したがって J. グッゲンハイムは 1896 年頃に来神して神戸支店を開設したと考えられる。居住地と会社の住所は共に三宮町 3 丁目 164 番地であり、1906 年に変更された住所も共に三宮町 3 丁目 163 番地だったことから神戸支店は自宅に設けられていたことがわかる。

1909 年以降の「KOBE DIRECTORY」には、新たに「Pines”, Shioya」の記載が加わる。J. グッゲンハイム夫人の居住地も塩屋に変更されているため、1908 年に一家で塩屋に移住したと考えられる。その後、J. グッゲンハイムは妻と子供 3 人とともに塩屋に暮らした。

1910 年に会社の住所が、当時の神戸ではビジネスの中心地である居留地の浪花町 22 番地に変更された。その後しばらくは同様の記載が続くが、1915 年を最後に J. グッゲンハイムに関する記載がなくなる。この事実は、「1915 年頃に一家で日本を離れサンフランシスコに移住した」という孫の証言とも一致する。アメリカでの J. グッゲンハイムの足跡は不明だが、1940 年にアメリカで逝去したとされる¹³⁾。

3.2 土地所有の変遷

J. グッゲンハイムは 1906 年 7 月に字ウエ田 970、971 と字垣ノ内 972 の連続する 3 筆の土地の一千年間地上権を得た。そして 1908 年 12 月、字ウエ田 970、971、972 の土地を不動産並びに建築材料の売買を目的に同年設立されたグーゲンハイム合名会社の名義に変更し（図 1）、同日に字ウエ田 964 の土地も取得している（図 2）。当時、外国人の土地所有は認められていなかったが、日本の法人名義なら土地所有が可能であり、外国人が日本で日本法に基づいて設立した会社は日本の会社同様の権利を持つとされていた⁷⁾。したがって、同社設立の目的は土地所有にあった可能性が高い。

1915（大正 4）年 5 月 14 日、字ウエ田と字垣ノ内にグーゲンハイム合名会社が所有していた土地全てを岸本謙太郎が取得する。このことから 1915 年に J. グッゲンハイムがサンフランシスコに移住したという事実はほぼ間違いない。

その後、土地を引き継いだ岸本謙太郎は 964、970、972 の周辺一帯の土地も取得し、それらを一つに合筆した。さらに相続した子息・武雄も合筆・分筆を行ったため、1957 年、旧グッゲンハイム邸が位置する土地の地番は 938-4 と改められた。翌 1958 年、同地は竹内鶴蔵が所有し、1962 年に竹内文吾らが相続した。2018 年以降は、KS メディカルサポート株式会社の所有となり現在に至る。

3.3 旧グッゲンハイム邸の推定建設年

旧グッゲンハイム邸は、塩屋町 3 丁目（旧・字ウエ田）に位置する、木造 2 階建の洋館である。未だ設計者や施工者などは不明である。1958 年以降は、竹内油業株式会社を営む竹内文吾の自宅だったため、一般に旧竹内（文吾）邸との呼称が定着している。また、取り違えにより“旧ライオンズ邸”としても認識されていた。ちなみに前掲写真（写真 1）の建物外観は現存する旧竹内邸の外観と一致したことから、旧竹内邸が J. グッゲンハイム一家の邸宅であったことは明らかである。また「KOBE DIRECTORY」に「Pines”, Shioya」と記載されているように、J. グッゲンハイムは、この洋館に「パインズ（松）」という愛称をつけていた。

1908 年 12 月 23 日に登記されたグーゲンハイム合名会社の帳簿には、J. グッゲンハイムの住所が字ウエ田 970 と記載されている。したがって、旧グッゲンハイム邸は 1908 年 12 月までに完成していたと考えられる。また、後（4.3 旧ライオンズ邸の推定建設年）で詳述するように、旧ライオンズ邸は 1908 年 10 月までに建設されたとみられる。したがって、前述の J. グッゲンハイムを知るといふ簗氏が証言した 3)、北側の洋館（旧グッゲンハイム）が南側の洋館（旧ライオンズ邸）よりも先に建った、という順番が正しいと仮定するならば、旧グッゲンハイム邸は 1908 年 10 月までに完成していたといえる。この事実は、法人登記簿の記録とも一致する。また、一般に住宅建設には半年から 1 年にかかることと、1906 年 7 月に土地を取得していることを考慮すると、旧グッゲンハイム邸の建設年は、1907 年頃から 1908 年 10 月頃だと推定できる。

4. 旧ライオンズ邸の概要

4.1 J. ライオンズについて

ここでは、神戸市立外国人墓地にある J. ライオンズの墓石に刻まれた情報やライオンズ追悼記事^{注 10)}などにより明らかになった J. ライオンズの履歴を報告する。

図 1 J. グッゲンハイムと J. ライオンズの土地所有状況（1908 年以前）

図 2 J. グッゲンハイムと J. ライオンズの土地所有状況（1908 年以降）

図3 J. ライオンズの取得地と関係する建物・土地の分布図（法務局所蔵の旧土地台帳、公図の情報に基づく）

J. ライオンズは、1865 年にトルコ・イスタンブール生まれのユダヤ人で、1886 年頃に来日した。横浜を経てから 1889 年に来神し、しばらく港湾運送業を営む C. ニッケル合名会社 (C. Nickel & Co.) に勤めた後、独立して明石町 18 番地（後に 19 番地に移転）に「廻漕及陸揚業」を営むゼー・ライオンズ合名会社を設立した。登記上の会社設立年は 1906 年となっているが、1901 年の「KOBE DIRECTORY」には「J. LYONS & CO.」の記載があり、には 1903 年のジャパクロニクル紙には 1902 年の日付入りの「J. LYONS & CO.」の新聞広告が確認できた。以上より 1900 年頃には会社は存在していたと考えられる。

神戸移住後の J. ライオンズ夫妻の住所は三宮町 26 番地だったが、1900 年より中山手通 3 丁目 83 番地に引っ越している。そして 1905 年に塩屋に移住した。

理由は不明だが、1910 年に J. ライオンズはゼー・ライオンズ合名会社の事業目的を「土地及建物売買業」に変更している。そして 1913 年、ゼー・ライオンズ合名会社を、ニッケル合名会社と合併させ、社名をニッケル&ライオンズリミテッドと改めた。その後 J. ライオンズは事業から引退し、妻とともにフランスに移住した。このことは、合併した会社の設立時の取締役役に J. ライオンズが見当たらないことから確認できる。ゼー・ライオンズ合名会社の事業目的変更は、渡仏に向け所有する不動産を売買するためだった可能性がある。

引退したのも束の間、1914 年頃には日本に戻り、J. ライオンズは 1915 年よりニッケル&ライオンズリミテッドの経営に加わった。しかし翌年、J. ライオンズは病に倒れ 3 月 24 日に神戸国際病院で亡くなった。葬儀はユダヤ式で執り行われたという。J. ライオンズの墓は春日野墓地にあったが、現在は、移転された神戸市立外国人墓地に埋葬されている。

4.2 土地所有の変遷

J. ライオンズは、1906 年 9 月に 975、976 の 2 筆、1907 年 3 月に 977 の 1 筆、字垣ノ内の隣接する合計 3 筆の土地をゼー・ライオンズ合名会社名義で取得した（図 1）。その後 1909 年 5 月に、これら 3 筆を 1 筆にまとめ 975 とし、それに枝番号をつけた 975-1、975-2 の 2

筆に分筆した。同日、975-2 の土地の所有権はラザラス合名会社に移転している（図 2）。残る 975-1 の土地に建っているのが、現在“旧グッゲンハイム邸”と称される旧ライオンズ邸である。

1911 年に 975-1 の土地と建物を川畑清蔵が取得（写真 2）し、1953 年に子息である純一が相続する。同年、純一から稲畑産業株式会社に所有権が移った。そして 1965 年、北側に位置する旧グッゲンハイム邸に居住していた竹内文吾が経営する竹内油業株式会社が、土地と建物を取得し、敷地北側に新たに社員寮を建設した。その後は、社員寮の施設の一部として洋館が使われるようになる。

写真 2 旧ライオンズ邸（個人蔵/1911 年頃）

以降、この洋館は竹内油業塩屋寮として、一般に知られるようになった。そのため神戸市で本格的に洋館調査が始まった 1974 年以降の記録には「竹内油業塩屋寮」と記載されている。その後、寮として使われなくなり空き家となっても竹内家が所有していたが、次第に建物維持が難しくなり売りに出されることになる。このことを知り、2007 年に土地と建物を購入したのが、現所有者のデュルト森本家である。

4.3 旧ライオンズ邸の推定建設年

旧ライオンズ邸は、塩屋町3丁目（元・字垣ノ内）に位置する木造2階建の洋館である。意匠の特徴などから建築家 A.N. ハンセル設計と推定¹⁾されているが、正確には不明である。これまで J. グッゲンハイムが施主であるとの前提で調査されてきたことにより、その建設年は1906年から1912年頃と推定されてきた。

今回の調査で新たに、J. ライオンズは塩屋の海沿い（塩屋町1丁目、元・字小谷）の土地を1902年5月に3筆、1905年7月に2筆、いずれも999年の地上権をゼー・ライオンズ名義で得ていたことが明らかに¹¹⁾（図3）。

当時、J. ライオンズが取得した5筆の土地の西隣には、オリエンタルホテルの別館シー・ビュー・ホテルが建っていた。夏になるとマリンスポーツなどを楽しむ多くの外国人がこのホテルを訪れたという。1906年6月11日付のジャパニクロニクル紙は、塩屋人気が高まり、海沿いの日本家屋が高値で貸し出されるなど地価が大幅に上昇していること、海外からの旅行者も増えていることを報じている。つまり J. ライオンズの取得地は当時の塩屋では一等地だったといえる。

J. ライオンズが塩屋に移住した1905年当時の自邸は、おそらくこの海沿いの土地に建っていた。撮影年は不明だが、オリエンタル・シーサイド・ヴィラが映る絵葉書（写真3）には、ホテル東側に数軒の洋館が確認でき、そのいずれかがライオンズ邸だったとみられる。

写真3 オリエンタル・シーサイド・ヴィラの絵葉書
（撮影年不明）

1908年10月15日のジャパニクロニクル紙は、同月10日に塩屋のライオンズ邸にて親しい人を招いた結婚披露宴が開催されたことを報じている。J. ライオンズは、1908年2月に字小谷の土地を全て手放しているため、この結婚披露宴は、字垣ノ内にあったライオンズ邸で開催されたといえる。J. ライオンズが1907年3月に字垣ノ内の土地を取得した後、住宅建設に半年から1年程度を費やしたと考えると、旧ライオンズ邸は1907年末頃から1908年10月までの間に建設されたと推定できる。

4-4. 塩屋における J. ライオンズの役割

J. グッゲンハイムと J. ライオンズは共にユダヤ人で、ほぼ同時期に隣り合う土地を取得し洋館を建設している。両者の間に何らかの繋がりがあった可能性が高いが、現時点では彼らを繋ぐ史料は見つからない。

また彼らが土地を取得した時期は、神戸郊外に移住する外国人数

が増加する時期とも一致する。鉄道が西に延びて中心部からのアクセスが良くなったことが要因の一つにあるが、最も大きな影響を与えたのは1899年の居留地返還に伴う外国人に対する居住・旅行・外出の制限が撤廃されたことだろう。

海と山が近い塩屋の魅力にいち早く気がついた最初の外国人と言われるのは、英国人実業家 E.H. ハンター（Edward Hazlett Hunter 1843-1917）¹²⁾である。彼は早くから日本人妻との間に生まれた日本国籍を持つ長男名義で塩屋の土地を取得し、後に範多商会名義でも広大な土地を取得した。そして1907年、E.H. ハンターは、六甲山開設の祖と言われる英国人 A.H. グルーム（Arthur Hesketh Groom 1846-1918）らと神戸オリエンタルホテルを買収し、翌年、塩屋のシー・ビュー・ホテルを、木造二階建てのオリエンタルホテル・シーサイド・ヴィラへとリニューアルオープンさせた¹²⁾。このホテルは E.H. ハンターの所有地のすぐ東側に位置しており、当時 J. ライオンズもその並びの土地を所有していた（図3）。

塩屋に移住した J. ライオンズは、当時三宮町在住だった英国系ユダヤ人である F.M. ジョネス（Frank Morris Jonas 1878-1950）と共に、米国の会社に勤め神戸に定期的に寄港していた英国人船長のワトソン（Captain Percy Watson 1864-1926）と一緒に塩屋で余暇を楽しんでいたという¹³⁾。F.M. ジョネスと J. ライオンズの親交がどのようなものだったかは不明だが、ユダヤ人としての繋がりがあったことは間違いなさそうである。1911年夏、F.M. ジョネスがワトソンにゼー・ライオンズ合名会社の経営への参画を依頼したことを受け、ワトソンは船長を辞めて、同社常務取締役役に着任する¹⁴⁾。1913年、合併によりニッケル&ライオンズリミテッドが設立されると、F.M. ジョネスとワトソンは同社の取締役に就任した。1919年、F.M. ジョネスとワトソンらは新たに塩屋土地合資会社を設立し、塩屋土地合資会社名義で範多商会が所有していた塩屋の山側の広大な土地を取得した（図3）。

1919年、F.M. ジョネスは東塩屋に自邸を建てて移住し、戦争により転居を余儀なくされるまで塩屋に住んだ。このジョネス邸は、解体の危機が訪れた時も後の所有者により西側に移築保存され、地域のシンボルとして長く大切に引き継がれてきたが、2013年に解体された⁹⁾。F.M. ジョネスは、国際委員長や神戸英国総領事館の名誉通訳などの肩書を持つ、神戸在留外国人コミュニティのキーパーソンでもあった¹⁵⁾。戦後、F.M. ジョネスはニッケル&ライオンズリミテッドをニッケル&ライオンズ株式会社として復活させていることから、J. ライオンズとは親密な関係だったといえる。

正確な年は不明だが、ワトソンも取得地の一角に自邸を建て、塩屋に移住した。その後は1924年に現在も続く外国人スポーツクラブ、塩屋カントリークラブを創設するなど、塩屋の外国人コミュニティの中心的人物となる。1926年にワトソンが亡くなると、旧ワトソン邸は、塩屋カントリークラブの施設として使われるようになった。

1933年、旧ワトソン邸を含む塩屋土地合資会社の所有地全てを英国人実業家 E.W. ジェームス（Ernest William James 1889-1952）が取得した。翌年、E.W. ジェームスは、旧ワトソン邸の敷地に自邸（現・旧ジェームス邸）、北側一帯の敷地には塩屋カントリークラブのクラブハウスや富裕外国人向けの別荘などを建設した¹²⁾。

このように後に塩屋の重要人物となる F.M. ジョネスやワトソンと塩屋を繋いだ人物が J. ライオンズだった。つまり、J. ライオンズは

塩屋が外国人に人気のリゾート地、郊外住宅地として発展していくきっかけを作った人物の一人だったといえる。

5. まとめ

本稿では、地域住民の証言を根拠に詳細な調査が行われることないままの建物情報が報告書等に記録されたことが、長年、旧グッゲンハイム邸と旧ライオンス邸の名称が取り違えられていた原因だったことを明らかにした。また、関係する出来事(表1)を辿ることにより、J.グッゲンハイム邸とJ.ライオンス邸の建設年を推定した。

“旧グッゲンハイム邸”の名は書籍や活動などを通じて、国内外に浸透しているため、現時点では新事実をもとに旧ライオンス邸だったと修正するのは難しい状況にある。しかしJ.ライオンスは、J.グッゲンハイムよりも神戸や塩屋にとって重要な役割を果たしていたと考えられることから、J.ライオンスの履歴とともに彼の自邸だったという事実を後世に引き継いでいくことが大切だと考える。洋館が次々と姿を消し、海辺に建っていた旧ジョネス邸も解体された今日の塩屋において、旧ライオンス邸や旧グッゲンハイム邸は多くの外国人が暮らした往時を物語る貴重な洋館である。したがって、これらの洋館が今後も引き継がれていくよう、塩屋における外国人の暮らしや彼らが地域に与えた影響などを明らかにし、これらの価値を再考することが今後の課題である。

表1 J.グッゲンハイム・J.ライオンス・塩屋関連年表

年	元号	J.グッゲンハイムに関する出来事	J.ライオンスに関する出来事	塩屋/神戸の出来事
1865			イスタンブールに生まれる	
1868明治1		ドイツに生まれる		神戸開港
1866明治19			来日(横浜)	
1867明治20				
1888明治21				山陽鉄道(現JR山陽本線)兵庫～明石間の運行開始
1889明治22			来神、C.ニッケル合名会社勤務	
1890明治23				シー・ビュー・ホテル(オリエンタルホテル別館)開業
1893明治26				E.H.ハンター塩屋海沿いの土地取得開始
1895明治28		来日(横浜)※		
1896明治29		神戸に移住※		山陽鉄道・塩屋駅停車場設置
1897明治30				
1899明治32				居留地返還
1902明治35			字小谷265,266,274-3地上権設定(5,16)	ビーチハウスホテル開業
1905明治38			字小谷261,274-8地上権設定(7,19)塩屋に移住※	
1906明治39		字ウエ田970,971,字堀之内972取得(7,11)	ゼー・ライオンス合名会社設立(4,27)字堀之内975,976取得(9,25)字小谷の土地を会社名義に変更(12,24)字堀之内977取得(3,11)	オリエンタル・シーサイド・ヴィラ開業
1907明治40				
1908明治41		グーゲンハイム合名会社設立(12,23)Japan Import & Export Commission社神戸支店長※・塩屋に移住※	字小谷の土地を全て手放す(2,13)J.ライオンス邸にて結婚披露宴が開催(10,10)	
1909明治42			字堀之内975,976,977を合筆し、975-1,2に分筆。975-2を手放す(5,28)	
1910明治43			ゼー・ライオンス合名会社の目的を「土地・建物売買」に変更	
1911明治44			字堀之内975-1(旧ライオンス邸)を手放す(6,17)	塩屋クラブ創設(推定)
1913大正2			ニッケル&ライオンスリミテッド設立登記(3,19)ゼー・ライオンス合名会社解散(10,29)遺失※	兵庫電気鉄道(現山陽電気鉄道)一ノ谷～塩屋間通
1915大正4		字ウエ田、字堀之内の土地(旧グッゲンハイム邸)全て手放す(5,14)遺失※	再来日し、ニッケル&ライオンスリミテッド取締役就任	
1916大正5			神戸国際病院にて逝去(3,24)	
1919大正8				塩屋土地合資会社が龍多商会の所有地の一部を取得
1924大正13				塩屋カントリークラブ創設
1925大正14		サンフランシスコにて逝去※		外国人土地法公布

※ Meiji Portraits/明治人物お雇い外国人: <http://meiji-portraits.de/> 及び「KOBÉ DIRECTORY」の記録より推定

謝辞：本研究は、JSPS 科研費 20K04899 (代表：水島あかね) の助成を受けたものです。また本調査に際し御協力を頂いた Julia Guggenheim 氏に心から感謝の意を表します。

参考文献

1) Sakamoto, K.: Eijin Kenchikuka Alex. N. Hansell (F.R.I.B.A.) no keireiki to sakuhi ni tsuite (in Japanese), Journal of architecture,

planning and environmental engineering (Transactions of AIJ.), vol 69, pp. 861-864, 1961. 10

坂本勝比古：英人建築家 Alex. N. Hansell (F.R.I.B.A.) の経歴と作品について、日本建築学会論文報告集 69, pp. 861-864, 1961. 10

- 坂本勝比古, 神戸市教育委員会：神戸市文化財調査報告 5 神戸の異人館一居留地建築と木造洋館, 1962
- 坂本勝比古: 旧グッゲンハイム邸-現・竹内油業塩屋寮-(明治の西洋館 21) 新住宅 8, 新住宅社, 1969, pp. 57-64
- 日本建築学会近畿支部, 神戸洋風建築物調査特別委員会：昭和 49 年度神戸市内における近代洋風建築物調査報告書, 1975
- 日本建築学会編：日本近代建築総覧, 技報堂出版, 1980
- 立脇和夫監修：幕末明治在住外国人・機関名鑑-Japan directory, ゆまに書房, 1996
- 洲脇一郎：外国人と土地所有権, 神戸市立博物館研究紀要第 14 号, 1998
- 兵庫県教育委員会：兵庫県の近代化遺産-兵庫県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書-, 2006
- 水島あかね, 浅見雅之, 玉田浩之：地域資産としての近代住宅の保存継承に関する研究-神戸市塩屋を対象にして, 住総研研究論文 No. 42, 2016, pp. 157-168
- 森本アリ：旧グッゲンハイム邸物語, びあ株式会社, 2017
- 日本建築学会近畿支部：旧竹内邸の保存活用に関する要望書, 2020. 8. 6
- 水島あかね：神戸市塩屋における外国人住宅地の開発と変容-「ジェームス山」の誕生(中川理ほか：空想から計画へ-近代都市に埋もれた夢の発掘, 思文閣出版, 2021, pp. 189-214)
- Meiji Portraits/明治人物お雇い外国人：<http://meiji-portraits.de/> (2021. 5. 31 参照)
- 笠原一人, 水島あかね：神戸塩屋の異人館「旧グッゲンハイム邸」と旧竹内邸の取り違い問題について, 日本建築学会大会学術講演梗概集 DVD (建築歴史・意匠), 2021. 9

注釈

- 報告書等(参考文献2、4、5、8)には、竹内邸、竹内家住宅などと書かれており統一されていない。ただ一般には旧竹内邸で定着していると考えられるため、本稿では旧竹内邸と記載することにした。
- 本調査は、本稿筆者である笠原および水島に加えて、森本アリ(“旧グッゲンハイム邸”管理人)、サラ・デュルト(シオヤプロジェクト)、信森徹(塩屋まちづくり推進会)の5名で実施した。
- 産経新聞：神戸の異人館「旧グッゲンハイム邸」は「ライオンス邸」だった?!, 2020. 8. 6, 毎日新聞：神戸の「旧グッゲンハイム邸」実は別人宅だった, 2020. 11. 5, 朝日新聞：旧グッゲンハイム邸、実は別人宅 半世紀以上取り違い, 2021. 1. 4 など。
- 1891年に神戸で創刊された「The Kobe Chronicle」が前身である。1902年に「The Japan Weekly Chronicle」と改題され、1940年まで続いた。
- 例えば1906年は2月2日発行、1909年は1月27日発行、1910年は1月6日発行となっている。
- 「ライオンズ」「ライランス」などの表記もあるが、公の記録は全て「ライランス」である。本稿では旧仮名遣い「ヲ」を現仮名遣いに改め「ライオンス」と表記する。
- この論文は参考文献2)にも所収されている。
- 英国人貿易商ジョーイ・エイブラハム(Joey Abraham 1896-1974)のこと。帰化して飯譲衛(えびらじょうえ)と名乗った。塩屋にあった旧飯邸は2001年に解体された。
- 1894年に英国で設立された法人で、ロンドンやニューヨークにも拠点を持っていた。
- The Japan Weekly Chronicle 1916. 5. 4
- いずれも、1906年にゼー・ライオンス合名会社社名義に変更されている。
- 大阪鉄工所(後の日立造船)を創設。日本に帰化し範多姓を名乗る。
- The Japan Weekly Chronicle 1927. 1. 20
- 同上
- 神戸又新日報 1965. 6. 2

[2021年6月2日原稿受理 2021年8月17日採用決定]